

秋季連続講座「グローバル・ヒストリーズ—国民国家から新たな共同性へ」

第1シリーズ「トランスアトランティック／トランスパシフィック」

## 《グローバル・ヒストリーズ》をめぐって

——トランスアトランティック／トランスパシフィックな視点をもとに——

崎山政毅

### はじめに

立命館大学国際言語文化研究所では、2010年11月から《グローバル・ヒストリーズ——国民国家から新たな共同性へ》と題した新規の連続講座を開催することとなった。小論ではその開始にあたって、本連続講座の意義と目的とを導入のための叩き台として提起したいと考える。

国民国家をア・プリオリな枠組みとして人文・社会科学的な観点から事象を論じることへの批判は、1994年から2009年にわたり全21シリーズにおよぶ連続講座《国民国家と多文化主義》において多面的に遂行され、その成果を深化させてきた。

その前提となる歴史的文脈は、以下のようなものであった。

19世紀後半のアフリカ分割の全面化によって最終段階に達し、両大戦期間に完全な確立をみた資本主義的世界市場（たとえばV. I. レーニンの『帝国主義論』はそうした歴史的背景をもたずには刊行しえなかった）は、まず近代植民地支配をその脊梁として有していた。その結果、国民国家を基軸とした近代植民地帝国（かつての帝国主義）は、さまざまな民族（エスニック・グループ）を国民（市民）のヒエラルヒーのもとに編成する一元統治下の多文化性を抱え込むこととなる。

その後20世紀半ばから前景化してきた植民地諸地域の政治的独立の動きは、世界規模で「範例」としての国民国家へ人びとの結集・統合を推し進めた。しかし国民国家は到達すべき「解放」としての究極目標ではなく、それ自体の定在様式に複雑きわまる敵対性と矛盾を抱え込むシステムであった。必然的にポストコロニアルな旧宗主国＝国民国家は、そこに強制的に連行された人びとやその末裔、あるいは戦争・貧困・抑圧など種々の理由から移住を余儀なくされた人びとが隣り合い混じり合う、多文化（多言語）社会という、国民統合原理にとってじつに困難な（しかし共存・共生という希望も伴う）状況をつくりだしたのである。また、旧植民地は「範例」の「不十分な翻訳」あるいは「模倣」という、自ら作り出してしまった枷に苦しむこととなる<sup>1)</sup>。

そしてこの非対称的に相応する状況が、国民国家という「共同体」に突き刺さった致命的な棘であることは、旧宗主国にとっても旧植民地にとっても今なお果たされていない脱植民地化の諸課題が明示している。そしてそれは1990年代までに、グローバル化がますます可視的になっていく過程につれて、国民国家の枠組みの中では到底解決しえない危機をもたらすこととなった。

以上の認識を起点として、連続講座《国民国家と多文化主義》では、危機の諸相を精査し、その核心をなしているのは何なのかを分析することを通底する課題として設定したのである。そして連続講座での研究報告と討論から得られた内実は、国民国家を超えることを介して危機を克服していくための普遍的な可能性を追究すべく、さまざまなテーマを設定し諸々のアプローチを用いて、広範な分野を横断する成果としてまとめられ公表・公刊されたのだった。

だがしかし、9月11日の同時多発テロを一大契機として事実上の幕を挙げた21世紀の最初の10年間からわれわれが得たものは、国民国家批判では対応することが困難な——あるいは不可能な——ようやく表面へ上向き現われ出てきた諸事象であった。

それはたとえば、ジェノサイド（エスノサイド）をはじめとする暴力であり、人身売買のような現代の奴隷制を含む人種主義であり、文化的不寛容の蔓延であり、圧倒的な人びとの移動・循環・離散である。そしてまた、多言語・多文化の矛盾にみちた混交・重合・接触・衝突から生まれる多様な表現であり、感覚の根底的な変容であり、新たな共同性への希求である。

これらの諸事象を、言葉と文化に向き合う批判の視点によって力ある問題として設定し、その問題の究明をめざすこと——そしてそれらの作業を踏まえて希望を臨む可能性を提起すること。これが新たな連続講座の意義であり目的となる。

## グローバル・ヒストリーから《グローバル・ヒストリーズ》へ

2000年8月にオスロ市で開かれた第19回国際歴史科学研究会議は、「グローバル・ヒストリーの展望：概念と方法論（《Perspective on Global History: Concepts and Methodology》）」と題されたテーマを中心としていた<sup>2)</sup>。このテーマの設定は、『アナル』誌・第56巻第1号（2001年）においてロジェ・シャルチエがいみじくも述べたように、20世紀を通じて歴史学的知の探究において前提ととらえられてきたいくつかの言説的規範やパラダイムに対する「一連の拒絶」のうえに成り立つものであった<sup>3)</sup>。

シャルチエがまとめるところによれば、それらは、①国民国家という枠組みをもとに、遡及的に歴史を確定しようという思考方法の拒絶、②「地方」・「くに」・「都市」のように画定された歴史的社会空間に固有な様相をモノグラフとして探究しようとする伝統的な区分の拒絶、③「遠くをないがしろにする」（セルジュ・グリュジンスキ）のような支配的傾向性を歴史学にもたらした「ミクロストリア」的アプローチの拒絶<sup>4)</sup>、である。

これらの拒絶が歴史研究にもたらすものは、きわめてラディカルなものである。なぜなら、惑星大の視座からさまざまな時間と空間を見通すことで、新しい歴史学の潮流を興そうという内容にはかならないからだ。シャルチエは、一次史料の綿密な読解と分析や個々の歴史現象（出来事）が「埋め込まれている」文脈の理解にもとづいてすすめられてきた、近代における伝統的歴史学的知と、それらの拒絶がどのように両立するのか、と疑問を呈している。

この疑問は「グローバル・ヒストリー」の提起の弱点を衝いており、たしかに両立させることが困難きわまる作業であることは言を俟たない。しかし両立は不可能ではないのである。求められている作業は、抽象的に述べれば「歴史的視点の時間的・空間的な脱中心化」となりうる、視点を相互に接続しながらも異なるレベルでの緻密な見通しを可能とする重層化によって果

たされうる。ポール・リクルの言葉を借りれば「それぞれの規模に、他の規模に視座を置いたならば見出せないことがらを見て取ることができるが、それゆえそれぞれの規模に見合った視点には、それぞれの存在意義がある」<sup>5)</sup>。リクルが述べるそれぞれの規模に見合った複数の視点（「それぞれの規模」をいつの・いかなるものとして設定するのか、が常に問われるにしても）を連関させる作業が不可欠なのである。

言い換えれば、1970年代後半にサンジャイ・スブラフマニヤムが粗くはあるが提起していた「接続された複数の歴史 connected histories」<sup>6)</sup>、非対称的な動的相互性（おそらくは）みちた文化や社会を想像し再構築してみることが求められている。とするならば、それぞれの固有性を保ちながら重層的に相互連関するさまざまな「世界の様態」の学際的かつ関係論的な研究の協働が不可欠であろう。

それはグリュジンスキの以下の主張からも明らかである。「この冒険に不可欠な道具を他の学問分野から借りてくることではじめて複合的な諸システムの研究に着手できるようなものなのであり、よって理論的、方法論的な問いかけと不可分に表裏一体となったものであるべきプロジェクトなのである」<sup>7)</sup>。

ただし彼の主張は歴史研究を主座においており、異なる学問分野をそれらの差異に注意と敬意を払いながら横断していこうとするわれわれの連続講座にあっては、歴史研究に最終的な成果が帰されるわけではない。そうではなく、セシル坂井が国際言語文化研究所でおこなった「文学史」をテーマとする講演で述べたように、従来言われてきた用語を使えば「歴史化された」歴史の叙述だけではなく<sup>8)</sup>、アクチュアルな「即時史」＝「無媒介の物語」(immediate history)をいくつも引き受けていくことが重要な問題群を構成している<sup>9)</sup>。

新たにわれわれが取り組みを始めたこの連続講座において対象のダイナミズムが浮き彫りにされるのも、その過程の只中においてである。それらはヘーゲル的な「普遍史」＝世界史ではなく、同時にアメリカ合衆国流の「ワールド・ヒストリー」でもない。単一なものに還元しえない厚みと奥行きをもった文化や社会の動態解明——われわれが《グローバル・ヒストリーズ》と複数形で呼ぼうとしているのは、そこから生れ出る可能性なのである<sup>10)</sup>。

このようなわれわれの方向性は、2000年にオスロの国際会議でナタリー・ゼーモン・デーヴィスが明確に指摘した、これまでの伝統的な対象と分析規模を放棄することなく、「グローバル性の意識 The Consciousness of Globality」に啓発されるような歴史研究こそが普遍的歴史研究の可能な実践であると強調したことと共振するものだと見える<sup>11)</sup>

## トランスアトランティック／トランスパシフィック

大西洋をまたぐ歴史的結合関係が、クリストバル・コロン（ちなみに彼はコロンボ、コロム、コロモなどいくつかの姓を署名したがコロンブス Columbus なる署名は一切存在していない）の新大陸到達（1492年）に端を発したことは周知のことだろう。3隻からなる彼の船団が現在のバハマ諸島中部にある「グアナハニ」島に上陸して先住民と出逢ったことは、航海日誌に喜びを含んだ驚きの筆致で描かれている。だが歴史の残酷は、その後のヨーロッパ（スペイン）と新世界との関係が植民地化の強要で象られるように転化していったことである<sup>12)</sup>。

その後の大西洋を越える（トランスアトランティックな）関係の中でもっとも重きを占める動的な歴史的結合関係はアフリカからの奴隷貿易——アフリカン・ディアスポラ——であった。奴隷貿易と言えば、北米植民地への黒人移入といったイメージが強い。だが、1969年にフィリップ・カーティンが『大西洋奴隷貿易』<sup>13)</sup>を上梓してからの30年間で数量的データによる人口史研究がすすみ、1999年にはスペイン・ポルトガル・イギリス・フランス・オランダそして北米植民者たちが関わった奴隷貿易の約70%をカバーするCD-ROMデータベースが完成している<sup>14)</sup>。それによると、イメージとは異なって、カリブ海地域およびラテンアメリカへの奴隷の「搬入」が多くを占めることが明らかになった。

このような歴史人口学的な面での進展の一方で注意を払うべきは、アメリカ合衆国の「大西洋史」研究者アリソン・ゲイムズが述べるように、「大西洋」を一体的な概念と措定し、その必然的結果として「大西洋」を一様な歴史的・社会的空間としてとらえる思考方法が、すぐれて近代の産物であり学界を限定的な場とした文化的構築物であるということである<sup>15)</sup>。

しかしそうした内省は無駄ではない。アフリカ（系）人を主体に据えたポール・ギルロイの『ブラック・アトランティック』や、E. P. トムソンの流れを汲んで大西洋の移民をとおして国際的に多民族・多文化的労働者階級が形成されたことを明らかにしたマーカス・レディカーとピーター・ラインボウによる『多頭のヒュドラ』など、「黒い大西洋史」や「赤い大西洋史」など、多様・多層・多重を踏まえたトランスアトランティック研究が、観念的な一体性を内破させ、人種主義を組み込んだヨーロッパ中心主義（ゲイムズが注意を払うべきと強調している「白い大西洋史」）を相対化してきているからである<sup>16)</sup>。

さて、トランスアトランティックと相応するトランスパシフィックな視点からの研究は、今までのところアジアからの近代移民史を中心としたものが主流であるといえよう。国際言語文化研究所の基幹プロジェクトとしての日本人・日系人の国際移動の研究があり、これは19世紀後半からの近代移民の問題を重点的に取り扱っている<sup>17)</sup>。さらに方法論的な問題があるにせよ、同様に、朴正熙独裁のもとで大韓民国が積極的に推進した南北アメリカへの海外移民政策の動態を解明することは東アジアにとってのみならず、広くアジア一般にとっても重要であろう（現在のフィリピンが採用している海外移民送り出し政策とも連関している）。また、現代の奴隷制とも言うべき、東南アジア・南アジアからの女性・児童の人身売買にかかわるグローバル・ジャスティスの確立とも密接につながる領域として、国際法学・国際政治経済学の問題関心とも重なり合う。

加えるに、中国華南地方からのトランスパシフィックな動きを忘れるわけにはいかない。極端な例ではあろうが、辛亥革命の中軸であった孫逸仙（孫文）の活動は、大陸中国—ハワイ—アメリカ合衆国—イギリスと太平洋と大西洋を横断してこそ成立しえたのだった。

さらに近世におけるトランスパシフィック研究が十分に展開しうるはずである。たとえば、バタヴィア（現ジャカルタ）を拠点として徳川期の日本や清朝中国とヨーロッパの交易を媒介したオランダ東インド会社を日本史プロパーの研究対象として限定する時期はもはや終わりを告げたのではないか。あるいは、オランダと角逐しながらアジアに浸透を図ったポルトガル人が商行為かつ探査活動として太平洋を横断したことが文書に記録されており、その中でおそらくポリネシアと思われる南回帰線周辺の島嶼を“Arquipélago capricórnio”として一括りにとらえ

ている<sup>18)</sup>。

このように、これまで目を向けられなかったために対象として設定されてこなかった事象がトランスパシフィックな視点からの究明対象の宝庫として存在している。それらの解明は、間アジアの交易研究の進展<sup>19)</sup>との回路を開くことと併行しながら、進められることがぜひとも必要である。

## おわりに

以上、立命館大学国際言語文化研究所の新たな連続講座《グローバル・ヒストリーズ》の開始にあたって、研究協働を出発させる基盤となりうる論点を述べてきた。ここで協働の在り方について、いくつかの論点を提起することで小論の結語に変えたいと思う。

人文・社会科学の諸分野における研究協働は、各専門領域（ディシプリン）の専門化がすすめばすすむほど、皮肉なことに困難さを増してきたと言っても過言ではない。その理由としてしばしば専門化＝「タコ壺」化が主因のようなラベリングがなされている。しかしそのラベリングは正鵠を射ているだろうか。否、である。

専門化自体が「タコ壺」化に直結しているのではなく、概念上でも方法論においてもアクチュアリティを喪失してしまったがゆえに（それでもなお専門化は進展しうる）「材質疲労」を起した分野が隣接分野との接続関係を断たれるようになった現象こそが問題なのである。

その状況に意識的かつ批判的でなければ、テーマ的な設定は共同の成果として、さまざまな分野の論者の論考が枚挙されるかのようにただ併存する、テーマ自体が宙吊りになってしまった「論集」などに結果するようになってしまっている。

では研究協働はいかにして、現下の困難を克服できるか。

少なくとも2つの可能性が現在存在している。それは第一に、テーマにおける共通性ではなく問題設定（*problematique*）の通底性や隣接性をもとに、研究者それぞれの方法論を立体的かつ有機的に位置づけることである<sup>20)</sup>。そして第二に、これまでのパラダイムを大きく揺さぶる学的横断を必然的に要請する、「大きな道」たりうる新しいテーマを見出すことである。

小論で提起した連続講座《グローバル・ヒストリーズ》は、いまだ端緒に着いたと言える状態にはないが、上記の2つの可能性を満たすものではないだろうか。

読者諸賢の生産的批判と積極的な協力を期待し歓迎したい。

## 注

- 1) 真島一郎「翻訳論」、同編『だれが世界を翻訳するのか—アジア・アフリカの未来から』、人文書院、2005年、9～57ページ。
- 2) この英語版のメイン・タイトルは、フランス語版では《Mondialisation de l'histoire: concepts et méthodologie》、つまり「歴史のグローバル化」となっている。この語用の差異には、熟考すべき論点が含まれていよう（*Proceedings/Actes*, 19<sup>th</sup> International Congress of Historical Sciences/ XIX, Oslo, 2000, pp.5-32.）。紙幅が足りないため、詳論することは別の機会に譲りたい。だが本連続講座は一貫して、この論点のもつ意味を踏まえて展開していく予定である。
- 3) Chartier, Roger, "La conscience de la globalité", *Annales. Histoire, Sciences sociales*, Vol. 56 No. 1, janvier-

février 2001, pp.119-123.

- 4) グリュジンスキが述べた「ミクロストリア的」なる形容詞を、カルロ・ギンズブルグの提起した「ミクロストリア」と混同するべきではない。歴史学におけるサバルタン・スタディーズのとめどない「越境的流行」の結果生まれてきた、学的な装いをとった下層民衆の政治的要求の代行主義を想起する必要がある(拙著『サバルタンと歴史』, 青土社, 2001年, 序章)。つまり「足下にはばかり目を向ける」ことを無前提に是とし、「足下」なる区分を超え出る連関を恣意的に拒否する集団的傾向を批判したものととらえるべきである。
- 5) Ricœur, Paul, *La mémoire, l'histoire, l'oubli*, Paris, Le Seuil, 2000, p. 267 ff,
- 6) Subrahmanyam, Sanjay, "Connected Histories: Notes towards a Reconfiguration of Early Modern Eurasia", in V. Liebermann (ed.), *Beyond Binary Histories*, Ann Arbor, The University of Michigan Press, 1977, pp.289-315.
- 7) セルジュ・グリュジンスキ, 竹下和亮訳「カトリック王国——接続された歴史と世界」, 『思想』第937号(2002年5月), 103ページ。
- 8) 「歴史化された」と認定する権利と資格は、誰によって・いかに措定しうのか。実証と史料分析が可能な限り「研究者の利害と無縁である」ことがその条件であるとすれば、それは主意主義による自己正当化が客観主義の機械的適用以外ではあるまい。基本的にその場合分析者と対象との関係性は疎外態をとるしかないだろう。さらに言えば、利害は近代研究機関における研究をロマン化しない限り、研究者の労働に内属する力として登場する。そうした「歴史化」とは異なるレベルで、史料が誰によって・なぜ・何のために・いかにして編成されたのかを「徴候的読解」によって明らかにし、史料の記述の行間から豊饒な物語を紡いでみせた、カルロ・ギンズブルグの『チーズとうじ虫』(杉山光信訳, みすずライブラリー, 2000年)から学ぶべきことは多い。
- 9) 『立命館言語文化研究』第23巻1号(2011年9月)の坂井論文を参照のこと。
- 10) メリーランド大学のゲイリー・ガースルは「西半球史 The Western Hemisphere History」なる概念を導入することで、複数のグローバル・ヒストリーを構想している。ガースルの設定が、本文で後述するようにわれわれの《グローバル・ヒストリーズ》連続講座でのテーマの一つである海洋システム間の比較関係史に適合的であるかどうかは今のところ不分明であるが、単一の「グローバル・ヒストリー」を構成するという方向性とは異なる志向を持っている論者たちが存在していることはたしかである。
- 11) *Proceedings/Actes*, 19<sup>th</sup> International Congress of Historical Sciences/ XIX, p.40. また, Chartier, *op. cit.*, p. 123も参照のこと。
- 12) S. グリーンブラット, 荒木正夫訳『驚異と占有』(みすず書房, 1993年)を参照せよ。
- 13) Curtin, Philip D., *The Atlantic Slave Trade: A Census*, Madison, Wisc., University of Wisconsin Press, 1969.
- 14) Eltis, D., Behrendt, S., Richardson, D., & Klein, H. S. (eds.), *The Trans-Atlantic Slave Trade: A Database on CD-ROM*, Cambridge, U. K., 1999.
- 15) Games, Alison, "Atlantic History: Definitions, Challenges, and Opportunities", in *American Historical Review*, 111 (2006). なおゲームズがその主著である『移民とイングランド大西洋世界の起源』(Migration and the Origins of the English Atlantic World, Cambridge, Mass., Harvard University Press, 1999.)で取り扱っている問題は、世界的なヒトとモノの動き(移民と商品貿易)を扱っている点で、《グローバル・ヒストリーズ》の問題系に入っているといえる。
- 16) ポール・ギルロイ, 上野俊哉・毛利嘉孝・鈴木慎一郎訳『ブラック・アトランティック——近代性と二重意識』, 月曜社, 2000年(Gilroy, Paul, *The Black Atlantic: Modernity and Double Consciousness*, Cambridge, Mass., Harvard University Press, 1993.). Linebaugh, Peter & Rediker, Marcus, *The Many-Headed Hydra: Sailors, Slaves, Commoners, and the Hidden History of the Revolutionary Atlantic*, Boston, Beacon Press, 2000.

《グローバル・ヒストリーズ》をめぐる（崎山）

- 17) 米山裕・河原典史編『日系人の経験と国際移動—在外日本人・移民の近現代史』（人文書院, 2007年）を見よ。
- 18) Alencastro, Luíz Felipe de, *O trato do viventes, Formação do Brasil no Atlântico sul*, São Paulo, Companhia das Letras, 2000. を参照せよ。
- 19) さらに杉原薫や脇村孝平らのアジア太平洋地域間の海洋交易を含む研究をも参照せよ。
- 20) 問題設定を共有しつつトランスアトランティックな歴史文脈をとりあげた論集として、国際言語文化研究所のプロジェクトをもとにした、西成彦・原毅彦編『複数の沖縄—ディアスポラから希望へ』（人文書院, 2003年）がある。

